

11 楽器を「奏でる」

【カザルスの” 出会い”】

演奏家パブロ・カザルスの名は、録音で残る彼の演奏とともに、なにより J.S.Bach の『無伴奏チェロ組曲』の” 発見” によって、われわれに知らしめられている。

私たちは港のそばの古い楽譜屋に立ち寄った。私は楽譜の束をめぐりはじめた。ふいに、時の流れに黄ばみ、ふれるとぼろぼろになりそうな一束の楽譜が出てきた。ヨハーン・ゼバスチャン・バッハの無伴奏組曲だった—チェロだけの曲だよ！びっくりして目をみはった。『チェロ独奏のための六つの組曲』だって？このタイトルの裏にはどんな魔法と神秘がかくれているんだろう？こんな組曲があるなんて、聞いたこともなかった。だれ一人、私の先生ですら口にしたこともないタイトルだ。私はなぜその店にいるのかということも忘れてしまった。ただただ、いまにも崩れそうなページを見つめ、そっとふれるばかりだった。あのときの情景はいつまでも色あせることはない。あの作品のタイトルページを見るたびに、かすかに海の匂いのする、あの黴臭い古い楽譜屋に引き戻される。

(『パブロ・カザルス 鳥の歌』)

彼のこの回想は、彼のあらゆる発言以上にわれわれの心を打つ。何気ない「ある日」に、彼の人生を決定した運命が凝縮されているからである。

この奇跡のような” 出会い” は、忘れられていた Bach の遺産をわれわれのもとに取り戻してくれた功績と同時に、演奏家と楽器との不思議な関係を、楽器を「奏でる」という営為の不思議さを、改めてわれわれに考えさせてくれる。そして、彼が一生をかけたチェロという楽器、そして彼がこの後生涯弾き続けた Bach、そして彼自身という三つ巴えの関係を思わずにはいられない。

【考察～楽器を「奏でる」】

《モノとしての「楽器」、音楽する分身としての「楽器」》

○モノとしての「楽器」

あらゆる楽器は木材、金属その他の素材で製作された”加工品”である。優れた楽器製作者は、楽器に飛躍的な改良を施すが、これらは実にすべて、音響物理学的な現実の下での試行錯誤の積み重ねであった。

楽器は時に”商品”でもあり、演奏家の手に渡って彼らの”道具”となる。これが、モノとしての楽器の実体である。

演奏者の奏でる音楽もまた、音響物理学的な現実に支配される。それらの楽器から出る音は、その空間の空気をしばし振動させた後消えていく。

これが、モノとしての音楽の実体である。

○音楽する分身としての「楽器」

さて、学習者にとって、楽器とは向き合うべき”相手”であったり、克服すべき”課題”であろう。

しかしすぐれた奏者にとっての楽器は、自分の内なる声とその肉声以上に歌うことのできる、かけがえのない伴侶となろう。楽器はこの時、単なるモノとしての”道具”にとどまらない、彼らと一体不可分の関係となっている。この瞬間、楽器は音楽する自らの”分身”である。

演奏家ばかりではない。スポーツ選手、たとえば優れたテニスプレーヤーにとってのラケットは、彼らの意のままにあやられる手のようである。

《時代にいま在る「私」、一回性の人生を生きる「私」》

○時代にいま在る「私」＝歴史的時間の中に生きる「私」

「私」はいま、西洋音楽に取り組んでいる。これは遠く離れたヨーロッパ大陸で花開いた文化である。私の住むこの日本とは、風土その他大きな違いがある地域の文化であったが、この普遍性の高い文化に向き合って何かを知ろうとしている。

「私」はまたバッハ、ベートーヴェンの時代から数百年を経た、現代とい

う時代に生きている。現代文明は、ベートーヴェンの時代にはなかったいくつかの問題に直面している。有限である資源環境の問題、世界をリードしてきた西洋合理主義のゆらぎ、etc. …。

一方、「私」は父母兄弟に囲まれた家族という場で育ってきた。私には父や母があり、またそれぞれの祖父母があり…。また、私にもいつか子どもが生まれ、又その子どもたちにも…。

「私」という存在は、連綿と続く人の列の一点であり、「私」の人生は、長い人類史のほんの一こまに過ぎない。

○一回性の人生を生きる「私」

人は、一人で生まれ一人で死んでいく。「私」はまず、私自身以外の何ものでもない。私は今まで多くの人に出会い、さまざまな事物を見聞きし、またいささかの人生体験もあった。

しかしなにもまして「私」は、この人生で音楽に出会えた。

音楽は人に”楽しみ”を与えるが、時に楽しみを越えた”啓示”を齎すこともある。ベートーヴェンがスコアに書いた—“Von Herzen_Mühsal wieder_zu Herzen gehen!” (心より出てふたたび心に来らんことを) —のような音楽も、確かに私は聴くことができた。

単なる空気の振動にすぎないはずの音楽が、なぜこのように貴いものに感じられるのか…。

《まとめ 「モノと心の世界」》

- 『モノとしての「楽器」』と『歴史的時間の中に生きる「私」』の視点には共通する面がある。いずれも、対象を客体視しようとしているところである。
- 『音楽する分身としての「楽器」』と、『一回性の人生を生きる「私」』の視点も、主観主義的であるところが共通している。

1.1 楽器を「奏でる」

- 1) 楽器はまず、音響物理の法則に規定されている。それを奏する人間も、まず歴史・環境に規定されている。
- 2) あらゆるすぐれた作品・演奏も、このような実世界の現実上に成り立っている。だからこそ、より貴い。なぜなら芸術とは（そして生きるということとは）あくまで実践であって、夢想ではないから。
- 3) 時代に立脚しつつ時代を越えるオリジナルな表現＝”本当の自己実現”もまた、そんな中から確かに実現していく。
- 4) 現実から遊離した妄想や、^{コンピュータ} 電脳空間上の仮想現実が世界に広がつつある昨今、以上述べてきたような「モノと心の世界」の関わりについて認識することは、重要に思う。